

桜寄贈 100 周年を記念して全米各州に桜の種子を贈りました

2012 年 4 月

1912 年、旅行作家エリザ・シドモア女史が日本の桜の美しさに打たれ、タフト大統領夫人に働きかけてアメリカにも桜を植えたいと長年願っていたことがついに実現し、高峰譲吉博士をはじめ関係地域の多くの人々の支援を受け、尾崎行雄東京市長がワシントンに 3000 本の桜を贈りました。それから 100 年の間着実に桜の木はポトマック河畔に根を張り、それに付随するかのよう日米の絆も深まってきました。第二次世界大戦中には敵国の花など切り落とせという声もあったそうですが、桜の美しさがそれを打ち消しました。今や文化も人種も全く違う両国が友好を保ち続ける一端を春になると繚乱と咲く桜が担っているとも言えるでしょう。

桜寄贈 100 周年のモニュメントとして、と同時に次の 100 年も日米友好がさらに深まることを祈念して(財)日本さくらの会は在米特命全権大使と高峰博士が初代社長であった第一三共(株)との連名で桜の種子を全米 50 州に贈りました。本来ならば 100 年前と同じように苗木を贈ることが出来れば良かったのですが、現在苗木の輸入は許可されないのです。

種子は多摩商工会議所が子供たちと一緒に集めたものや山形県の名木久保桜、薬師桜から金田聖夫さんが集めたもの、吉野山保勝会の皆さんが採取したもの、また石川林業試験場が兼六園などから採取したものなど約 5 万粒。

「次の 100 年も友情が続くように…」横路衆議院議長・日本さくらの会会長。「高峰博士が発明したアドレナリンや他の薬が人々を笑顔にするのと同じようにこの種から育った桜も博士の意思を継いで人々を笑顔にすることができるように…」中山譲治第一三共(株)社長。「さくらは美しく明るく潔い。贈った種が花開いて日米友好を深め人々を楽しませることができるように…」藤崎在米特命全権大使。3 名連名のメッセージカードと共に種は美しい桜模様の漆塗りの箱に入れられ、全米さくら祭りにおいて全米各州から選出されたさくらプリンセス一人一人に手渡され、各州で育ててもらおうように託しました。また、Arbor Day Foundation (日本の緑化推進機構のような団体)にも 3 万粒が託され、すでに発芽が確認されています。

いつの日かワシントンポトマック川と同じような名所が全米各地に広がり、日米の絆が更に深まることを祈らずにはられません。+